

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。 Copyrighted materials of the authors.

「アフリカ史叙述の方法にかんする研究」(2011年度第4回研究会)

日時：2012年3月29日(木) 13:30-18:00

場所：AA研小会議室(301)

報告者1：溝辺泰雄(AA研共同研究員、明治大学国際日本学部)

報告タイトル：「『アフリカ史のアフリカ化』に関する一考察：近年のアフリカ史叙述研究から」

報告者2：永原陽子(AA研所員)

報告タイトル：「『アフリカ史研究入門』について」

1. 溝辺泰雄「『アフリカ史のアフリカ化』に関する一考察：近年のアフリカ史叙述研究から」

報告者は本研究会において、対象論文(Brizuela-Garcia, Esperanza. 'The History of Africanization and the Africanization of History', *History in Africa*, Volume 33, 2006, pp. 85-100.)の内容を基に、「アフリカ史のアフリカ化」について検討した。

* * *

対象論文は、16ページ6節からなり、アフリカ史叙述における「アフリカ化」の流れを跡づけた後、「アフリカ化」に対する筆者の立場を提示する構成となっている。学部時代はラテンアメリカ史を専攻していた筆者(現米国・モンクレア大学アフリカ史講座助教)は、アフリカ史研究の領域において、歴史が「アフリカ化(①欧州植民地宗主国側による偏見(制限)を排除し、アフリカの史的動態を記録するための<方法論・問い・史料のアフリカ化>と②叙述する<主体(歴史家)のアフリカ化>)」されねばならないという考えが当然として受認され、「アフリカ化」の意味と限界について批判的検討がされていないことが、アフリカ史研究の領域における特異性と指摘する。こうした状況を産み出している背景として、筆者は、西洋中心の歴史学界において「アフリカ史」が否定されていた中、「アフリカ史」自体の成立可能性を証明することから始めなければならなかったという、アフリカ史叙述の形成・発展過程にその一因があるとす。しかし、筆者は「どれだけアフリカ諸社会の経験に根ざしたものにしても、アフリカの言語で語られたものにしても一確かに十分に「アフリカ的」にはなるかもしれないが—それが歴史学における有効な方法論を構成するものとは言えない」(p.96)と主張する。アフリカ史研究の萌芽期からすでに

半世紀以上が経ち、歴史学の領域においても主題や方法論の面に於いても「アフリカ史」という研究領域がすでに確立した今日、アフリカ史研究において問われる問題も、偏狭な「アフリカ化」を超えた、世界の諸地域を対象とする歴史学の研究と問題を共有できるような方法論や主題を模索する必要があると筆者は提言する。

* * *

本来は内部に多様性を有し、ディアスポラも含む隣接領域のみならず時間的・空間的な遠隔領域との間においても流動的な関係性を包含する「アフリカ」という地域概念を固定化し、専らその固定化された「アフリカ」を研究の必要条件として要求する、アフリカ史の「アフリカ化」の限界を指摘した本論文の主張は傾聴に値する。今後は、近年、国内外の研究者がその可能性を模索している「比較史」の視座を取り入れ、アフリカ大陸内外の、フィールドを異にする歴史家たちが、対等な立場で研究上の相互対話を進めることで構築される「対話に基づく歴史叙述」を模索すべきであろう。

2. 永原陽子『アフリカ史研究入門』について

本共同研究の成果として『アフリカ史研究入門』（仮）を出版することについて主査から提案した。

本共同研究は、歴史学の立場から従来の「アフリカ史」叙述を再検討し、周辺諸領域との連携・協働の意味を重視しつつも、歴史学のディシプリンに基づいて「世界史の中でアフリカ史を見る」こと、あるいは「世界史に開かれたアフリカ史を書く」ための方法を検討することを目的としている。そのような立場から、地域の設定と世界との関係（「アフリカ」というまとまりの相対化、サハラ以南と以北の区分の積極性と問題点、ナショナル・ヒストリーの扱い、など）、時代区分（プレ・コロニアル、コロニアル、ポスト・コロニアルの三区分の相対化、など）、史料の諸問題（文字史料の可能性、オーラル・トラディション/オーラル・ヒストリーと文字史料の関係、など）についての論点を整理し、歴史学の一分野としてアフリカ史を研究するための手引きとなるような書物を作成することについて議論した。

同書の前半にはアフリカ史の一定の「通史」が必要となるが、それについては、網羅的な叙述を目指すのではなく、「時代の見取り図」方式によっていくつかの時代の大きな全体像を積み重ねていく方式をとることで合意した。

今後の研究会の中で、これらについてさらに検討を続けることとする。

(いずれも文責は報告者)